

ハードボイルド探偵の冒険

阿部公彦

「百年の散歩」
多和田葉子

多和田葉子の小説を読んでいると、いかにも多和田葉子の小説を読んでいるときに起きそうな変なことが起きる。以前、御茶ノ水駅近くの喫茶店で『容疑者の夜行列車』を読んでいると、帰り際、まちがえて隣りの人の鞆に本を入れてしまったことがある。はっと気がついて「いや、あの、似てるもんで……」と、何が似ているのかわからない自分の黒鞆と『容疑者の夜行列車』を示し、逃げるように鞆に駆けこんだのだが、慌てていたせいで肝心の本を相手の鞆に差したままにしまった。鞆の持ち主は、一心不乱にパソコンに文字を打ち込む三十くらいのスーツ姿。『容疑者の夜行列車』なんてタイトルの本が鞆に刺さっているのを見つけたらさぞ驚くだろう。ちょっとだけ（いい気味だ）という気分が湧いた。結局、電車でUターンして本を

取り戻しに行ったが、こちらが「すみません、まちがえちゃって」と意味不明の言い訳をしながら鞆をもそもそいじっているというのに、男はほとんどパソコン画面から顔をあげもせず「うむ」と頷いただけだった。

『百年の散歩』もまた、こんな事態に巻き込まれそうな本である。著者のスタイルとしては『容疑者の夜行列車』や『雲をつかむ話』の系譜にたつたもので、設定は私小説風。著者の住むベルリンのごく日常的な風景が描かれる。しかし、ふつうの私小説と違うのは、自分より相手の方に関心があることだ。「わたしにとっては負の世界に分け入っていくことの方が美味しいものを食べることよりも魅力的」という主人公は、道に迷うことを楽しみ、あやしい方へ、魔の方へ、変な人物へと吸い寄せられる。妄想は羽根を生やし、

一見ふつうに見えた人までだんだんわけのわからない表情を見せ始める。セールスマンが「このクリームをつければ九歳児の肌になる」と化粧品を売りつけようとしてきて、それから試しに自分でやってみろ、と言うと、頬にそのクリームを塗りほんとに九歳児に変身してしまったので、その幼い肩をつかんで「すぐに家に帰りなさい」と命ずる、などという夢想があちこちから湧き出す。

作品は連作形式。「カント通り」「カール・マルクス通り」などベルリンに実在する通り名が各篇のタイトルに冠せられそのまま舞台となる。でも、果たしてこういうものを、「小説」と呼んで大丈夫なのか、ちょっと躊躇もする。とにかく言葉がうじゃうじゃ湧き出してくるのである。「賭博者」の上演風景は圧巻で、勢いがありすぎてどこまでが描写

なのかわからなくなる。「追い詰められた兎や鹿は人の心をしめつける、ひきつける。それをエロスと呼んでしまうことに吐き気を感じる」「絶望に酔っている。これが幸福。幸福という言葉が信用できないのも当然」「心を入質にとられているので、そんな幸福から身を引く離すことができない。ああ、外に出たい」。著者の持ち味は、シャープな観察と、妙な妄想と、ひどくまっとうな意見や情念のこもった言いつのりと、それから思わぬぐりぐり線を引いて本から頁をもぎ取り見知らぬ他人の鞆に勝手に突っ込みたくなるような、目眩のするほど楽しくきらびやかな連想や屁理屈とが混ざるところ。じんわり感動するヒマなどない。こういう言葉のパフォーマンスを、いったいどういうカテゴリーに入れたらいいのだろう。

主人公は孤独であることにこだわる。他人との境界を安易に超えない。パーティでは同じ人と五分以上しゃべってはいけないという、いわゆる「五分ルール」を遵守するかのよう、かかわった人とも数頁後にはさっと別れる。読者に対しても同じ。説明しよう、感動させよう、甘えよう／甘えさせようという姿勢はなし。むしろびりびりして「時間な

いんだからね」とばかりにさっさと話を進める。言葉はときに独り言めいてぶつきらばう。つんけんし、カドが立つ。何かに関心を持って、じわつとうるんだ目で見つめるような湿った興味にはつながらない。ぐいぐい突っつくだけだ。

でも、不思議と荒涼とした感じではない。それどころか、心地良くてずつとこの人の声を聞いていたいという、おだやかな信頼が生まれる。連想と妄想のオンパレードはぜんぜん「リアル」ではないのだが、この作家の手にかかると場所やものや死者が思考を持ち言葉を発することが、メモでもとるべき事態に思えてくる。主人公の孤独は内面を囲いこむための装置ではなく、むしろ自我やら主体やらを外にむけて開く。自我なんてどこの誰が持ってもいいし、誰でもシェアできるさ、とでもいう寛容さがこの作品にはある。だから、あやしい相手の中にもずつと入っていくのだ。

多和田葉子是一种のハードボイルド探偵である。彼女の前では、世界はすべて謎めいている。何食わぬ表情で何かたくらんでいる。ときにはひどい異をしかけてくる。多和田探偵の方も負けてはいない。油断せずに、いつ

何を仕掛けてくるかと身構えている。いや、やられる前にやり返してやろうとさえ思っている。にもかかわらず、まんまと出し抜かれることも多い。世界とはそれほど奥が深いものなのだ。探偵、がんばれ。

本書の各篇には「あの人」と呼ばれる得体の知れない人物が登場する。主人公は「あの人」とのかかわりをあれこれ夢想し、待ち合わせさえもくろむが最後まで実現されない。「あの人」を想うときだけは探偵も心のやわらかい部分を見せるかのようだ。「あの人」っていったい誰？ への答えは読者のお楽しみとしておこう。

ところで、多和田葉子を読もうとしない人に多和田葉子を読ませるにはどうしたらいいのか。激動のヨーロッパの真ん中で、何重もの意味で「移民」の役割を全うしている作家のこのしごといたくまじさを、他の誰にも真似のできないこのことばのパフォーマンスを、今、読まなかつたらアウトでしょ、なんて言っても無駄か。もっと悪辣な手口で、犯罪すれすれのラインで、無理矢理、鞆にその本を押しこんでしまおうかと思ったりする。

(新潮社刊・税別定価一七〇〇円)